

布施の心

スマトラの大津波、新潟の地震、大雪、温暖化の影響か異常気象が毎年のように世界を襲っています。ボランティア活動、支援も盛んに行われているようです。布施とは物や心を贈るということでしょう。しかし布施の成立は施す者、施される者、そして施しの対象となる物などが清らかでないと布施とは言えないので。これを三輪清浄と言います。そうしますとどうも私たちが行つている布施の行は怪しくなつてまいります。差し上げたが失敗した、というような物惜しみの心が残つてはいなかつただろうか、又普通なら捨ててしまふような物を差し上げいい顔をしていないだろうか、戴いた方も独り占めして多くの人に分け与えることをしないでいるのではないだろうか。著述家の犬養道子さんの話です。

道子さんが小さい頃、年末になるとお母さんは道子さんを連れて毎年孤児院へ慰問に行つておりました。その時に必ずおみやげをたくさん持つて行きます。それも道子さんが大事にしている人形やおもちゃを持つて行くのです。子供心に「どうして」と思つてお母さんに聞きますといつも次のように言つたそうです。「自分のいらないものを人さまにあげても、差し上げたことはならないのよ」そしてこうも付け加えました「人の役に立ちたいと思うなら自分も少しは痛い目をみなけりやね」と。私たちが人さまにものを差し出すとき、自分の不用になつた物に限られてはいないでしようか、「惜しいな」とでも思いながらあげているのではないでしようか。これを戴いた人が助かる事はあります。喜ばれることがあるでしよう。しかし自分にとつて入用なものと不用なものを手放すことの気持ちの段差は大きいものがあります。自分に痛みを伴わない贈り物は人の心には響かないでしよう。

「こんな大事なものを」と相手に贈り主の心が届いたとき、その贈り物は相手に喜ばれると思ひます。そうして自分の偽善的な気持ちからも解放されます。どのような人でも誇りがあるのです。どんな欲しい物であつても余り物を与えた時には喜びよりも屈辱感の方が強くなつてしまします。差し上げても恨まれることになりかねません。しかしそうは言つても完全な布施はなかなか出来そうにありません。たまればたまるほど手放したくないのがお金だそうでありますし、たまつたら少しでも減ると不安になつてくるのも人間の性のようなものでしよう。でもそのような「私」というものをよく知つての布施もあるのではないかと思うのです。その事を知らずに「してあげてやつたのだ」「あんなに多くしてやつた」等の思い上がりだけは持たないようにしてみたいのですね。「つまらない物ですが、なにもできませんが・・・差し上げる方が逆に負い目さえ感じる心が仏教の布施精神であります。貧しき時代は「持ちつ持たれつ」が生きていましたが、豊かさは、すっかりこの事を忘れさせました。

人の憂いに寄り添うからこそ「優しくなれるそんな時代になればなあと感じています。
「おかげさま、もつたいないことで・・・」どんなに豊かになつても、幸せを感じ取れる大切なことだと思いますが・・・